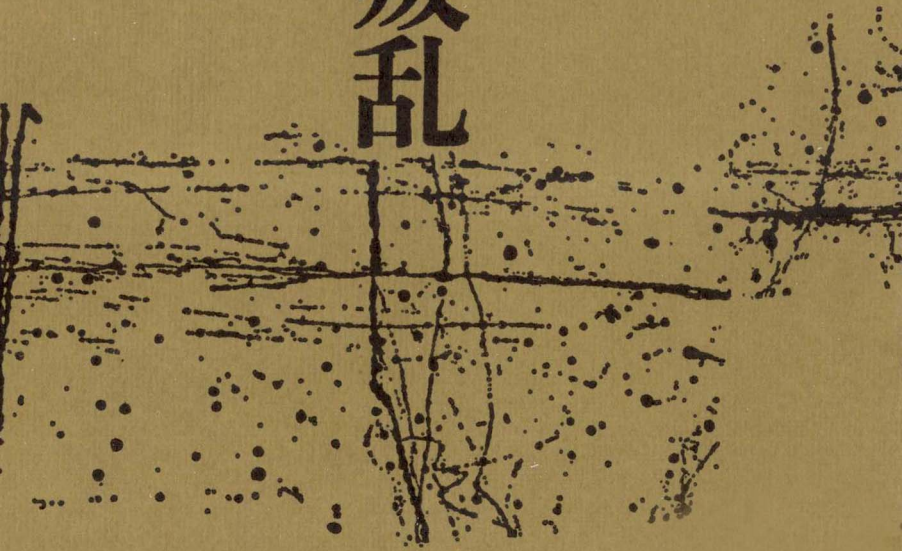


早乙女貢

近衛兵の叛乱

竹橋事件顛末記



早乙女貢

近衛兵の叛乱

竹橋事件顛末記

新人物往来社

近衛兵の叛乱——竹橋事件顛末記——

昭和53年6月10日 初版発行

著者 早乙女 貢

発行者 菅 英志

発行所 株式会社 新人物往来社



東京都千代田区丸の内3-3-1 新東京ビル
電話代表(212)3931 振替東京6-151643

乱丁・落丁本はお取り替えます。(鎌倉印刷・小泉製本)
(定価はカバー・帯に表示してあります)

目次

近衛兵の叛乱 五

鬼の骨 七

叛臣伝 一

あとがき 三

近衛兵の叛乱——竹橋事件顛末記——

近衛兵の叛乱

長野県の伊那から出て来た青年が、神田錦町の第四大区第一警視分署に拘引されたのは、明治十一年九月二日の夜だった。

その青年は前島修、十九歳。所持の戸籍謄本が身分を証明した。逮捕の理由は、強盗殺人である。分署から二町ほどしか離れていない錦町三丁目五番地前島とめが、強盗に押込まれて斬殺された。とめは一人暮しで、猫が一匹いるだけだった。

逮捕した大竹四等巡査の報告書によると、露地を巡邏中、その青年を発見した。青年は被害者の家から走り出てきたところだったという。家の中を調べてみると、顔見知りのとめが血の中に横たわっていた。すでにこと切れていて、その血のついた足あとが残っていたし、青年の足も衣服も血で汚れていた。

だが、一等巡査の取調べで、修はとめの実の弟であることが、直ぐに判明した。朴訥な青年で、平静に見れば、下手人とは思えない。旅支度だった。東京へ着いたばかりだという。

時刻は午後八時すぎである。まだ洋燈ランペンの時代だし、秋の午後八時といえば、寝に就く者が多い。

殊にこのあたり、開成学校の鍵ノ手になった露地裏で、静かなものだった。

丁度、巡邏の交替の時刻で、早番の杉という巡査が、青年の言葉を立て証した。

「分署にもどるとき道を訊ねられたので憶えていたんじや、ありや犯人じゃあるまい。交替して貴公が巡邏に出たとき逢ったのなら、殺しのひまがないじやろな」

兇器も見当らなかつた。それに靴のあとが畳や玄関に残っていた。修青年は草鞋穿きだったのである。

素人目にも、兇器は日本刀だとわかつたが、修は匕首一本持っていなかつた。

法律の勉強をするつもりで上京してきたというし、頼りにして来た姉を、斬殺するはずもない。

「いや、あげな場に出っ喰わせば、誰でちや逮捕しますたい、物凄か勢いで走って来たとですもん。血まみれでっしょうが、逃がされんですたい。尋問ばしようとしても、暴れまわるんじやけん、仕様んなか、打っ叩いて逮捕したとですたい」

青年は昂奮が静まると、たしかに半狂乱になっていました、と認めている。

「見たんです。下手人を見たんです、後を追っていたので、邏卒なんかに邪魔されたと思つて……」
言いさして、口ごもつた。四年前に邏卒の称は廃されていたのである。

修が見たというのは、しかし、それらしい影にすぎなかつた。十メートルくらい離れていたという。三丁目の露地へ入つたとき、その影はとめの家の前にいた。

修の姿を見たからであろうか、急に歩きだした。そのときは、まだ修には怪しむ理由がない。そこがとめの家だと知つたときは、影は露地の突き当りを曲ろうとしていた。

入ろうとして、夜気に臭った血が異常を感じさせた。さして広くもないしもた家である。兇変は一目で知れた。

「姉さんが!？」

修は駆けこんで、とめがこと切れているのを見ると、すぐに、(いまの奴が)下手人だと気がついて走りだしたのである。

見たのは影だけであった。年齢の見当もつかず、人相も分らない。強いていえば、二十歳から四十歳の間というくらいであった。そこまで答えたあとで、ただ、……と言いかけて、首をかしげた。巡査は聞き咎めた。

「ただ? なんだ」

「足が、片足を曳きずるような」

「跛者か」

「はっきりとは見えなかったのですが、たしか、少し曳きずっているような」

片側は開成学校の高い塀で、鼻を突き合わせるようにして、しもた家が五六軒並んでいた。こちら側は塀などない。広い格子窓が、そのまま、道路に面している。千本格子の嵌った出窓作りで夏など内側の障子を取払って簾をかけるくらいだから、外を歩きながら一目で家の中が見える。八月の半ばから障子をたてているが、仄明りが道路に洩れて、影を浮び上らせた。

はっきりしなかった。とめを斬殺したとき転ぶか何かして足を痛めただけくらいのもものかもしれない。跛者だという確信は持てなかったのである。

ただ確実なことは、足跡が残っていた。靴の大きさは十一文で、

「腕の立つやつだ。刀も鈍刀じゃない」

ということだった。

靴を穿いている者は、まだ少ない。その線から調べるのが、早いかもしれなかった。

ともかく、修は釈放された。一と晩、分署に泊められただけであった。

強盗殺人として処理されたが、修には何を盗まれたのか見当もつかない。

箆筒たんすの底から四十数円の貯金通帳が出て来たほかに、財布の中に小銭が二円たらず、長火鉢の小

引出しにも、紙幣と銀貨など交せて三円ばかり入ったままになっていた。

「なんだ、これでは、強盗は一文も盗らずに逃げたんじゃないか」

調べに当たった警部補が呆れたように言った。

物価が違いすぎるので、換算も難しいが、当時、下等巡査の月給が六円、シャモ鍋が一人前五銭

だった。

最高の太政大臣の月給が八百円、官員の最低が十七等出仕で十二円。

前記の巡査の月給が安いのは、官員ともいえない『等外』だからである。

「強盗じゃなくて、怨恨かもしれないな」

とめは二十三歳。界限でも評判のいい女で、囲い女もだった。美人というほどではないが愛嬌があ

る。あの縹緞きりようなら男出入りの二つや三つはあろう、と噂された。

近所の金棒曳きの立話では、とめは二、三年前まで深川の方の白首だったという。それなら、男

出入りがあつてもおかしくない。

「一体、困っていた男というのは、どこの金貸か、官員野郎か」

修も男の名は知らなかった。朴訥な青年にも姉が困い女の生活をしていたらしいことは知っていた。たまにくる手紙には、親切な御方のお世話になり居り、何不自由なく暮して居ますゆえ、此方のことは心配なきよう、それにつけても、勉学のころさしがあるのなら、東京へお出なされて宜しかるべく、……とそんな文面で、男の名は書いてなかった。

だが、とめのこと新聞に出たせいで、その男がやってきた。

「内務省十等属西村織兵衛です、わしが忙しくて、ちよつと足遠になつた間に、とんだことに……」
窮屈な洋服の膝を揃えて、西村は涙声で言った。その手には数珠がある。頬骨の突き出た、痩せた男だった。背も低いし、洋服を着けていても風采が上らない。少くとも、上京したばかりの青年には、東京の官員さまという権威を感じさせない男だった。

まだ三十歳そこそだろうが、貧相なので四十過ぎにも見えた。

貧相なだけでなく、律義な性格に見えた。悪くいえば小心者だらうか。

たしかに官員といつても十等属というのは前記の十七等出仕で最低である。話しているうちにわかつたのだが、内務省の中の往復課という、いわば連絡係の下っ端で、小使に毛の生えたようなものだった。

十二円の月給では、いくら物価の安い当時でも、女を囲うなど出来るはずがない。

「小金を廻しておるのな、こういうこともできるのだが」

耳朶じだを緒おらめ、西村は揉手もてをしながら、言った。おどおどした眼に、妙にしたたかな光がある。

これだけのことをするには、月給の四、五倍は必要だろう。おもてむき最低の官員でいながら、裏で高利貸をしては妾宅が通いを楽しんでいるのだ。

出世に熱中して孜々ししとして働いている同僚を肚裡はらの中で、嗤わっているにちがいがなかった。

内務省と聞いてから、警部補の態度は和らいだように見えた。

身分的には、警部補は十六等出仕で、西村よりは一段上になる。が、同じ内務省だということ、同胞意識を持たせたのだろうか、このころは、まだ政府組織がくるくるとよく変るもので、去年一月、東京警視庁が解体されて、警察権力のすべてが内務省に吸収（太政官布告第四号）されたのである。大久保利通のマキャベリズムによる発想であった。

「——あの男に、見おぼえは？」

警部補は修をもの蔭へ呼んで囁ささやいた。犯人のからだつきに似てはいないかというのである。修はかぶりを振った。

「足も悪くないし……まるきり感じが違います」

西村はとめの遺した通帳と現金を見せられると、少くとも二百円は持っていたはずだし、珊瑚さんごの簪かんざしや籠甲べんこうの櫛くしなどが失くなっている、と叫びだした。

「もう二年以上も、私が世話していたのだ、それだけの貯金はあつたはずだ、やっばり強盗にやられたのだ」

むろん、西村も犯人に心当りはまるでない、と言った。

葬式が済むと、修は家を出るしかなかった。内務省につとめているのなら、下っ端でも苦学青年に何かの便宜を計ってやることはできるはずなのに、西村は、そんなことは暖気にも出さなかった。「縁起が悪い。早く売り払ってしまいたい」

家財などもてきばきと処分してしまった。官員さまの高利貸だけあって、そつがなかった。修は東京を離れる前に、深川に行った。

深川佃町は富岡八幡の門前から海手の蓬萊橋を渡ったところで、お稲荷さまの前の河岸に麦湯店が並んでいる。江戸時代から、あひる、河岸と呼ばれる岡場所だった。

「お力さんという女を知りませんか」

修は店の前にしゃがんで煙草を吸っている女に声をかけた。

「知っているよ、書生さん、馴染かい」

女は黄いろくむくんだような顔に、妙な笑いを浮べて、

「まだ昼前だよ、いまから遊びかい」

「どこなんです、お力さんは」

「あっちさ」と、唾え煙管で顎をしゃくって、「向うから二軒目さ、ほら、あの柳の前だよ」

お力というのは、とめの昔からのともだちだった。とめのお通夜のとき、お高祖頭巾に顔を隠してやってきた。

「あたしのような卑しい女が、葬式に顔を出したら、堅気の仏に傷がつきますから」

お力はこう言つて香奠をそつと差し出したのだ。

苦勞をした女だけに、先まで見通していた。困ることがあったら、訪ねてお出でな、とめさんの舎弟なら、あたしの舎弟も同じだから、そう言つてくれたのだ。

姉を失い、西村織兵衛から突き放された修にとっては、広い東京で、お力しか頼れる者はいなかった。

「やっぱり来てくれたんだねえ」

お力は朝風呂から帰つてきたところだった。表は麦湯の店で、葦簀張りだが、裏に小部屋がある。岡場所の切見世が、かたちを変えただけのことだった。

「こんなところだけど、お上りよ。麦湯を飲むかえ」

「いいんです。故郷に帰る前に、と思つて」

「そう、帰るのね、やっぱり」

お力は化粧しながら、鏡の中で修を見た。

せまいところだし、女の部屋だ。煎餅蒲団が壁際に二つ折りにして押しやられているし、衣桁に派手な長襦袢や着替がだらしなく掛けられていて、女の匂いに満ちている。

田舎から出て来た苦学生には、あまりにも強烈で、あまりにも淫らすぎたろう。

修は、上り柵に横坐りに腰をかけている。

ザンギリの髪が額にかかつて、横顔が憂いに沈んでいる。

無理もない、と思った。青年は志を抱いて上京してきたにちがいない。交通がまだ不便なこの時代に、長野県から出て来たのにまたてくてくと山の中へ帰らねばならない。

お力のような、自堕落な生活をしている女から見ると、うんざりすることだが、旅の疲れは、青年にとっては大したことはないにせよ、一生を田舎でおくらなければならなかったことが、どれほど、絶望的なことか。

その哀しみは、お力にもよくわかった。

(可哀想に、いい書生さんなのに)

抱きしめてやりたいような気持だった。

「ついてないんだね」心とは反対に、突き放すように、お力は言った。「上京した晩に、姉さんが殺されるなんて、ひどい話さ。でもねえ、修ちゃん、世の中ってこんなものさ。生き馬の目を抜くお江戸だから」

「わかります。でも、うまくやっている人もいます」

「そうさ、そりゃアいるさ、官員で高利貸ってやつだって……ふふふ、でも、そいつのおかげで、とめさんは堅気の暮しができたんだからねえ。おかしなものさね。ついてるってのかしら、とめさんみたいな美しい女を二年間もおもちゃにした上に、今度の騒ぎだって手柄をたてたんだからねえ」

「——今度の騒ぎって？」

「おや、知らないのかえ、竹橋の騒動さ、ほら、近衛砲兵のさア……」